

近江湖東における3世紀の大集落

いなべちやうひことみちやう
彦根市稲部町・彦富町

いなべいせきぐん — 稲部遺跡群の発掘調査 —

稲部遺跡群は、水田農耕を行うだけでなく、様々な物資が交易され、各種のものづくりが行われ、多くの人びとが集住し、地域社会の核として政治的なまとまりの中心となる拠点的大規模集落です。稲部遺跡群が語る弥生時代の終わりから古墳時代の初めの様子を発掘調査成果から紹介します。

1 集落の立地と大きさ

稲部遺跡群（稲部遺跡・稲部西遺跡）は、滋賀県彦根市稲部町・彦富町に所在する近江湖東地域の弥生時代終末期から古墳時代初頭（庄内式期から布留式期初頭・西暦3世紀）を中心とした拠点的大規模集落遺跡です。1981年の第1次調査ではじめて確認され、2013年から2016年の市道改良工事に伴う発掘調査を経て、2018年からは遺跡の範囲や内容を確認するための発掘調査も行っています。遺跡の広がりや内容は東西約500m、南北約200m以上と推定され、これまで全体の内わずかな面積に相当する約9,000㎡の発掘調査を行った結果、多くの竪穴建物跡や土器を確認し、人びとが集まって生活した様子が明らかになってきました。



▲稲部遺跡群の位置
琵琶湖の東、滋賀県湖東地域に位置します。

▲稲部遺跡群の広がりや発掘調査区
弥生時代終末期頃（約1,800年前頃）
■は発掘調査範囲です。

遺跡景観の想像図▶

弥生時代終末期～古墳時代初頭頃の様子
竪穴建物は旧愛知川の流路に面した微高地につくられました。縄文時代後期・晩期の土器が出土していることから、微高地は縄文時代後期頃（約4,000年前頃）には形成されていたようです。

各流域には集落が点在し、荒神山の北には湖上交通の舞台となった琵琶湖が見えます。荒神山山頂近くには、古墳時代前期末・4世紀末に荒神山古墳（前方後円墳・全長124m）がつけられました。



2 弥生時代後期後半から古墳時代前期までの長期にわたる大集落

弥生時代後期後半から古墳時代前期の200年以上にわたり、大半が住居とみられる竪穴建物が連続とつくりられています。同じ微高地に長期間集落を営み、居住域を形成しています。



▲竪穴建物 古い時代の建物跡が埋まってから、新しい時代の建物が連続してつくりられています。



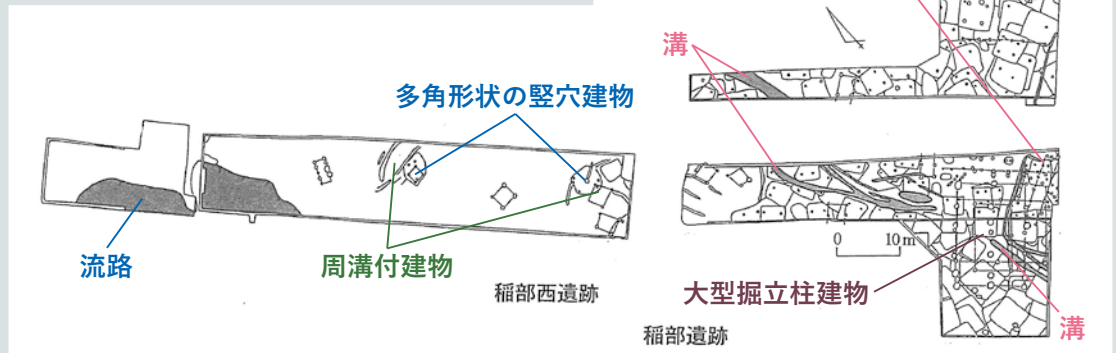
▲土坑に廃棄された大量の土器
集落北端の土坑(穴)には庄内式期から布留式期の多くの土器が捨てられていました。

▲中央に炉穴をもつ平面が多角形状の竪穴建物

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての集落の変化

- 弥生時代後期後半から庄内式期初頭：平面四角形の竪穴建物とわずかな多角形状の竪穴建物による集落を形成。
- 庄内式期：平面四角形の竪穴建物が主体で、西側で周溝付建物も建てられる集落が継続。後半には北端部に柱列によって区画される空間が出現。集落東外縁の大溝が機能。
- 庄内式期末から布留式期初頭：方形区画と掘立柱建物が出現。複数の溝の開削。
- 布留式期初頭以降：方形区画の廃絶後、大型掘立柱建物が出現。

※庄内式期、布留式期とは、使われた土器の特徴に基づく時期区分です。西暦2世紀から3世紀にかけて、弥生時代後期→庄内式期→布留式期の順に時代が変化していきます。



▲主な調査区の遺構配置図 S = 1 : 約1,200
(稲部遺跡2次・3次・6次・7次および稲部西遺跡1次・2次調査)

3 大きな溝、区画と大型建物

集落東外縁には大溝が掘られ、長期にわたり区画、排水施設などとして機能していました。弥生時代終末期から古墳時代初頭には溝などで平面四角形に区画した方形区画ほうけいいくかくがつくられ、大型の掘立柱建物が建てられました。方形区画や大型建物は、政治や祭祀の拠点であった可能性が考えられます。統率力と土木技術、建築技術をもった集団によって計画的に造営されたことがうかがわれます。



▲大溝 集落東外縁の10m以上の幅をもつ溝跡の土層どそう。



▲竪穴建物群と方形区画南端部



▲大型柱穴群と桃の種 複数の柱痕跡があり、桃の種が出土した柱穴もあるため、祭祀と関わる可能性もあります。



▲大型掘立柱建物 方形区画の後に建てられました。人が立っている場所が柱穴の位置です。

4 交流の範囲

遺跡では主に近江地域でつくられた土器が出土していますが、なかには、庄内式期から布留式期にかけての少数のがいらいけいどき外来系土器が出土しています。外来系土器とは、他の地域の土器や他の地域の土器の特徴をもつ土器を指します。山陰、畿内（大和）、北近畿、東海（美濃、伊勢、遠江ほか）、南関東などの各地域から運び込まれた土器やこれらの他地域の土器の特徴を持ちつつも地元の近江地域の粘土を使ってつくられた土器が出土しており、交易関係のベースとなった地域間交流の様子を知ることができます。



▲受口状口縁甕 うけぐちじょうこうえんかめ 口と底の形が特徴的な近江地域の煮炊き用の3世紀の土器です。



▲外来系土器 がいらいけいどき 山陰、畿内、東海、関東系などの土器が出土しています。

5 交易された品々と集落の生産

様々なものが交易品として集められた可能性があり、粘土を整形して野焼きを行う土器どきの生産のほか、原材料を入手して溶かした銅を鑄型いがたに注ぎ込んで製品を作る青銅器鑄造せいどうきちゆうぞう、鉄を打ち鍛えて製品を作る鍛冶作業かじ、木を整形する木製品の製作という各種の手工業生産が行われていたと考えられます。



▲青銅器鑄造に関連する建物跡
複数の炉跡を伴います。



▲青銅器鑄造関連遺物
銅の溶解に使用されたと考えられる
土製品など



▲銅鏃(青銅製の矢じり)
と棒状青銅製品



▲鍛冶に関連する炉跡



▲鍛冶関連遺物 炉材などの土製品や金属のかす



▲带状漆塗繊維製品 絹織物



▲鍛冶に関連する石器
作業台やハンマーとして用いられた



花崗岩製の台石・敲石



▲槽(木製容器)
製作途中の未成品



◀ガラス玉

6 稲部遺跡群から見える弥生時代終末期から古墳時代初頭の社会

稲部遺跡群は、手工業生産工房、政治拠点、祭祀拠点を含むとみられる竪穴建物、大型の掘立柱建物が一定の空間配置をもって計画的に造営された大集落でした。集落は、中国では三国時代にあたる西暦3世紀にピークを迎えるとともに、地域集団の指導者として首長権力に関わる階層の人びとの居住空間や集落の組織的な生産活動を示す近江湖東地域の拠点を形成していきました。

稲部遺跡群の調査成果は、広域の流通網や物資の交易基盤が整い、大集落を中心とした「国」と呼ばれる政治的なまとまりが生まれていく弥生時代から古墳時代への社会変化、その歩みを物語っていると考えられます。今後も発掘調査や出土遺物の整理によって遺跡の調査検討を進め、調査成果の公開に努めていきます。

近江湖東における3世紀の大集落 — 稲部遺跡群の発掘調査 —

2021年(令和3年)3月発行

編集・発行 彦根市文化財課
〒522-8501 滋賀県彦根市元町4番2号
Tel: 0749-22-1411(代表)
Fax: 0749-22-1398(代表)
E-mail: bunkazai@mx.hikone.ed.jp

